万葉集巻十一・十二作者未詳歌における地名歌の非民謡性

栃尾　有紀

はじめに

　近代以降、万葉集巻十一・十二の作者未詳歌は民謡ではないかと考えられてきた[1]。その後、巻十一・十二の研究は民謡／非民謡論争を中心に深められてきたが、それぞれ何を以て民謡とするかという立脚点を異にしていた為に未だ結着せず、問題は残されたままになっている。本稿は、巻十一・十二に即した新しい角度から、民謡的性格の一つに挙げられてきた地名含有率の高さを読み解き、その非民謡性を明らかにしようとするものである。

　まずは民謡説を中心に展開された巻十一・十二研究史の問題点と課題を明らかにすることから始めたい。初めて両巻の歌を民謡と言ったのは芳賀矢一『国文学歴代選』（明治四一）で、次いで佐佐木信綱『和歌史の研究』（大正一〇　訂正再版）が巻十一～十六までを民謡集と述べた。これを受けて注釈書の解説に民謡説が見られるようになり、澤瀉久孝、鴻巣盛広、土屋文明、春日政治、久松潜一など主立った研究者が同意するようになる。

　当初の民謡説には「国民詩」と「技術詩」との区別があり、技巧のない民衆の歌を民謡と考えていた（志田義秀[2]「日本民謡概論」明治三九）。両巻所収歌の作者を民衆と考えたのは作者未詳だからだろう。佐佐木は、遣新羅使人歌や中臣宅守と狭野弟上娘子との贈答歌までも民謡としており、民衆に下級官人が含まれていたことを窺わせる。

　その後、作者未詳性、素朴性・郷土性、類歌性・集団性などの属性が指摘されてくる。そのうち作者未詳性は、民衆という集団に共有される民謡が作者という個人名を持ちにくい為に、当初から民謡の属性と見られていた。

　次いで素朴性・郷土性が属性として示される。「天真爛漫の趣」（佐佐木前掲書　大正一〇）、「素朴純情、野趣の横溢」（鴻巣『万葉集全釈　第三冊』昭和七）、「文化人より離れた野人の内生活を窺ふことの出来る」「民謡的色調」（春日『万葉集総釈　第六』昭和一一）、「民族心、社会心、一般に集団意識と称すべき表現」（土屋『万葉集私注　第十一巻』昭和二七）などの指摘がそれに当たると思われ、具体的には、呪術や実生活の素材に関する表現、露骨な性の表現、寄物陳思歌の地名含有率の高さなどを指す。

　最後に、類歌性・集団性が属性として示される。恐らく澤瀉『万葉集新釈』（昭和六）の指摘が最も早く、次いで土屋「万葉集中の民謡に就いて二三」（昭和七）、さらに春日と久松が『万葉集総釈　第六』の概説で言及している。類型や類想の歌が多く、それ故に非個性的普遍的であり、歌の成立の背景に伝誦や流動を経た集団性が認められることを言う。

　こうして民謡説が無批判に受け入れられていく中、やがて民謡説への批判が始まり、歌の生態把握（高木市之助・土橋寛ら）と内容や表現の

研究（森脇一夫ら）により民謡説は否定される。しかし、それまで指摘されてきた民謡の属性は、両巻の歌の代表的特徴として残ることになる。

高木[3]は、民謡を原始[4]社会の産物として文学に対する別の範疇に分類して民謡説を否定、民謡の属性についても民謡に限った性質ではないと捉え直している。高木による批判の功績は、類歌性・集団性を両巻に固有の問題としてではなく、古代和歌の生態（前代的な非個性等質の社会の残照）として捉え直した点にある。

続いて土橋[5]も、創作歌を一回的な抒情表現と規定して対極に民謡をおいた（民謡は集団的抒情を内容とし、伝承性を常態とした著作権のない歌）。その上で、殆どの作者未詳歌は、個人的抒情でありながら創作歌ではない再生歌であるとして、これを「民謡と創作歌の中間的な存在」と位置づける。高木・土橋の見解は、両巻を作歌参考書あるいは規範集として編纂された、または原資料がそうであったと考える点でも共通している。

他方、森脇一夫『万葉の美意識』（昭和四九）は、両巻の歌と天平期歌人の歌とに天平期以降の詩語を使った観念的な歌い方が共通して見られることに着目した。そして、両巻の歌は、都会的貴族的個性的であると述べ、作歌及び編纂年代、作者層、作歌背景も天平期の著名歌人と同様に考えるべきことを主張した。森脇論により民謡説否定の流れは強まったが、民謡説が当初から天平期下級官人の歌を含んで出発したことを思えば、未だ民謡説の想定の範囲内にあると言えるかもしれない。

中川幸廣『万葉集の作品と基層』（平成五）も作者層と作歌及び編纂年代の想定は森脇論とほぼ一致する（森脇論より広い天平期歌人のほぼ全体、中下級官人を含む万葉の基層部分と想定）。中川論では、民謡説により指摘されてきた素朴性・郷土性が「文学活動としての民謡性」として評価されている点が注意される。素朴性・郷土性が指摘できそうな歌を民謡性と結びつけずに理解するのが本稿の目的である。

こうして民謡説は否定されたが、民謡の属性は特徴として再確認され、巻十一・十二両巻の歌は民謡でも創作歌でも貴族和歌でもない複雑な位相の歌として曖昧に捉えられることになった。ところで、かつて高木・土橋は、両巻は参考書として編纂されたのではないかと述べたが、仮にそのような編纂意識があったとすれば、外部から両巻の歌を規定する力が働いていることになり、単に表現や性格から歌の実体を見極めることは難しくなる。ただし、作者未詳性、素朴性・郷土性、類歌性の三点が両巻所収歌を特徴付けていることは事実であるから、民謡／非民謡論争を一旦離れ、両巻に即して捉え直す必要はあるだろう。

そこで本稿では、素朴性・郷土性の一端を担うとされてきた地名含有率の高さを取り上げ、改めて両巻の歌の性格を考察してみたい。澤瀉「万葉集の巻々の性質」（昭和二八）にも「諸方に伝誦せられてゐる間にその土地々々の名を詠み込まれるやうになつた」とあるように、地名含有率の高さは民謡説の根拠の一つだった。人麻呂歌集を除く地名は、巻十一に六一例、巻十二に八三例あり、寄物陳思歌の含有率は巻十一で三二%、巻十二で二八%と比較的高い（吉田義孝『柿本人麻呂とその時代』（昭和六一）によると、東歌六〇%、未勘国歌のみ三二%）。その背景には、服属の印として宮廷[6]に献上された民謡には地名が多く[7]含まれていたという考えがある。高野正美『万葉集作者未詳歌の研究』（昭和五七）は、民間の寿歌に淵源[8]する序歌方式「地名＋景物」に表れる地域

性は民衆性と絡み合っており、例えば巻十二より巻十一の地名含有率が高いことは、巻十一に地方色が強く、巻十二が都会的であることを示すと述べている。

　このような考えに対し、森本治吉『万葉集の芸術性』（昭和一六）のように両巻の地名が「殆ど大和国に限られてゐる故に、地方民謡の性質を有しない。殊に地名は奈良の附近が多い故に制作の時代も甚だ新しいと思はれる」として、民謡説を否定する考えもある。首都圏にも民謡があったとすれば畿内の地名が多いというだけで民謡説を否定することはできないが、「地方民謡の性質を有しない」という指摘は重要である。高木・森脇らによって指摘されてきたように両巻の作者未詳歌の殆どは作者判明歌と等質な類型歌であり、その為これを民謡とするなら作者判明歌も民謡にならざる得ないからである。

　民謡説を離れて見る時、寄物陳思歌の地名含有率はどのように捉えることができるだろう。そこで寄物陳思歌における地名の偏在及び質に焦点を当てて検討してみたい。

第一節　物象と地名

　例えば、巻十一[9]天地部・地象・川には、次のような地名歌が見られる。

⑪2701　明日香川　明日も渡らむ　石橋の　遠き心は　思ほえぬかも

⑪2702　明日香川　水行き増さり　いや日異に　恋の増さらば　ありかつましじ

⑪2703　ま薦刈る　大野川原の　水隠りに　恋ひ来し妹が　紐解く我は

⑪2706　泊瀬川　早み早瀬を　むすび上げて　飽かずや妹と　問ひし君はも

⑪2708　しなが鳥　猪名山とよに　行く水の　名のみ寄そりし　隠り妻はも

⑪2710　犬上の　鳥籠の山なる　不知哉川　いさとを聞こせ　我が名告らすな

⑪2713　明日香川　行く瀬を早み　早けむと　待つらむ妹を　この日暮らしつ

⑪2714　もののふの　八十宇治川の　早き瀬に　立ち得ぬ恋も　我はするかも

⑪2715　神奈備の　打回の崎の　岩淵の　隠りてのみや　我が恋ひ居らむ

⑪二七一五「神奈備の打回の崎」は明日香川付近と考えられるので、いま打回の崎を明日香川のうちに入れると、明日香川は四例となる。ほかに、大野川、泊瀬川、猪名川、不知哉川、宇治川が各一例ずつ見られる。大野川が大和国高市郡辺りにあったとすると（『大和志』は富雄川の下流で広瀬川に注ぎ込む辺り、契沖『代匠記』は大和国高市郡としている）、明日香川、泊瀬川、大野川と藤原京周辺の川名が並んでいるように見える。巻十一川の項では藤原京を中心とした川に、大和国周辺の宇治川（山城）と不知哉川（近江）、猪名川（摂津）が加わっていると理解してみたい。

　続いて、巻十二天地部・地象・川池の地名も見てみる。この項には地名歌が八首ある。

⑫3010　佐保川の　川波立たず　静けくも　君にたぐひて　明日さへもがも

⑫3011　我妹子に　衣かすがの　宜寸川　よしもあらぬか　妹が目を見む

⑫3012　との曇り　雨布留川の　さざれ波　間なくも君は　思ほゆるかも

⑫3013　我妹子や　我を忘らすな　石上　袖布留川の　絶えむと思へや

⑫3014　三輪山の　山下とよみ　行く水の　水脈し絶えずは　後も我が妻

⑫3018　高湍なる　能登瀬の川の　後も逢はむ　妹には我は　今にあらずとも

⑫3019　洗ひ衣　取替川の　川淀の　淀まむ心　思ひかねつも

⑫3020　斑鳩の　因可の池の　宜しくも　君を言はねば　思ひそ我がする

⑫三〇一二、三〇一三に布留川が二例見られ、佐保川、宜寸川、三輪山の川、能登瀬川、取替川、因可の池が各一例ずつ見られる。能登瀬川には、奈良県高市郡の重坂川と滋賀県坂田郡近江町能登瀬の天野川との二説があるが、③三一四「磯巨勢道なる能登瀬川」を参考にすると大和地方の川と推定されるので重坂川だろう。取替川は『和名抄』に大和国添下郡鳥貝郷の川名とあるのに拠ると、巻十二川池の項では、三輪山の川と能登瀬川を除き、平城京を中心とした川名が並んでいると言えるのではないだろうか。

以上のことから、大凡の見当として、巻十一の川は藤原京を、巻十二の川は平城京を中心としていると考えられそうである。他の物象の場合にも、このように地名に偏りが見られるのであろうか。続いて、同じ水辺である巻十一の海の項を見てみる。

⑪2727　酢蛾島の　夏実の浦に　寄する波　間も置きて　我が思はなくに

⑪2728　近江の　沖つ島山　奥まへて　我が思ふ妹が　言の繁けく

⑪2729　あられ降り　遠つ大浦に　寄する波　よしも寄すとも　憎くあらなくに

⑪2730　紀伊の海の　名高の浦に　寄する波　音高きかも　逢はぬ児故に

⑪2731　牛窓の　波の潮さゐ　島とよみ　寄そりし君は　逢はずかもあらむ

⑪2732　沖つ波　辺波の来寄る　佐太の浦の　このさだ過ぎて　後恋ひむかも

⑪2735　住吉の　岸の浦回に　しく波の　しくしく妹を　見むよしもがも

⑪2737　大伴の　三津の白波　間なく　我が恋ふらくを　人の知らなく

⑪2742　志賀の海人の　火気焼き立てて　焼く塩の　辛き恋をも　我はするかも

⑪2743　なかなかに　君に恋ひずは　比良の浦の　海人ならましを　玉藻刈りつつ

⑪2747　味鎌の　塩津をさして　漕ぐ舟の　名は告りてしを　逢はざらめやも

巻十一天地部・地象・海（木屑・埴生・舟を含む）には、右の十一首の地名歌がある。三津が二例、夏実、近江、遠つ大浦、名高の浦、牛窓、佐太、住吉、志賀、比良、塩津が各一例ずつある。夏実と佐太は所在不明だが、夏実は「酢蛾島の夏実の浦」から現在の菅島がある三重県鳥羽湾の辺りと推定できるので、難波と近江以外の地名は五例となる。川の項と違い藤原京や平城京という視座からは離れるが、巻十一海の項は難波・近江を中心としていると言えるかもしれない（近江・遠つ大浦・比良―近江、住吉・三津―難波、夏実―伊勢、名高の浦―紀伊、牛窓―備

前、志賀―筑前、佐太―不明）。
港という項であれば難波・近江に偏るのは当然かもしれない。しかし、海の項であれば、同じ畿内の和泉や摂津や播磨の海辺、或いはもっと紀伊半島の海辺の地名が出てきても良いように思われる。実際、巻十一動植物部の藻と貝の項では、地名は紀伊半島に偏っている。

⑪2780　紫の　名高の浦の　なびき藻の　心は妹に　寄りにしものを
⑪2795　紀伊の国の　飽等の浜の　忘れ貝　我は忘れじ　年は経ぬとも
⑪2797　住吉の　浜に寄るといふ　うつせ貝　実なきこともち　我恋ひめやも
⑪2798　伊勢の海人の　朝な夕なに　潜くといふ　鮑の貝の　片思ひにして

巻十一の藻と貝の項の地名は、地名歌四例中三例（名高の浦・飽等の浜・伊勢）が紀伊半島にあり、他一例（住吉）が難波にある。近江や摂津や播磨は勿論、中国地方や九州地方の海辺も全く取り上げられない。藻は⑦一一三六「宇治川に生ふる菅藻を」のように川や池の藻であっても良く、また貝も海の貝が多いとは言え②二二四「石川の貝に交じりて」のように川の貝であっても良いと思われるのに、川や池の名も挙がらない。そもそも当該箇所以外の貝の用例では、三津（①六八）、千沼の海（⑦一一四五）、住吉（⑦一一四七、一一四九）と畿内の地名が歌われており、紀伊半島の地名は出てこないのである。このことからも、紀伊半島に偏ることが自然でないことは分かる。

また、巻十一の貝の項には地名以外の点にも特色がある。それは貝という素材の歌われ方である。貝の用例では、「恋忘れ貝」が十九首中八首と最も多く、他は土産として貝を拾う歌など単に貝を「貝」としか呼んでおらず、どのような貝であるかに注意を払わない。ところが、巻十一の貝の項では「うつせ貝（⑪二七九七）」「鮑の貝（⑪二七九八）」「磯貝（⑪二七九六）」と貝の種類を詠み込む。物象による分類という意識からなのか、様々な貝に焦点を当てようとする態度が窺える。歌われ方と同じように、地名に対しても分類意識が働き、名産地や名所への興味から紀伊半島の海辺に偏ったのではないだろうか。

巻十一海の項と藻貝の項には、巻十一川の項と巻十二川池の項と同じく、地名の偏在傾向が見られるようである。それは、海の項や貝の項で確認したように自然の結果とは思われず、物象ごとに地域が限定されているかのような印象さえ受ける。

同様の傾向は、水辺の物象だけでなく、陸の物象にも認められるようである。例えば、巻十一動植物部・草の項には次のような地名歌がある。

⑪2757　大君の　御笠に縫へる　有間菅　ありつつ見れど　事なき我妹
⑪2766　三島江の　入江の薦を　かりにこそ　我をば君は　思ひたりけれ
⑪2771　我妹子が　袖を頼みて　真野の浦の　小菅の笠を　着ずて来にけり
⑪2772　真野の池の　小菅を笠に　縫はずして　人の遠名を　立つべきものか
⑪2774　神奈備の　浅篠原の　うるはしみ　我が思ふ君が　声の著けく

右の地名四例のうち有間を除く三例（三島江・真野の浦、真野の池）は現在の大阪にある。大阪は菅や薦の名産地であり、有間もそれに準ずると考えられるので、菅や薦に付く地名が大阪中心に偏るのは当然と思

われる。しかし本来、歌の素材としての菅や薦に付く地名は大阪を中心とした地ばかりではない。「梯立の倉椅川（⑦一二八四）」「雲梯の社（⑦一三四四）」「春日山（⑦一三七三）」「三室の山（⑪二四七二）」のように様々な地があり得るはずである。ここでは名産地を中心として地域を定めているのだろう。

　地名の偏在傾向の検討として、最後に、巻十一天地部・地象・山の地名を取り上げてみる。

⑪2695　我妹子に　逢ふよしをなみ　駿河なる　富士の高嶺の　燃えつつかあらむ

⑪2696　荒熊の　住むといふ山の　師歯迫山　責めて問ふとも　汝が名は告らじ

⑪2697　妹が名も　我が名も立たば　惜しみこそ　富士の高嶺の　燃えつつ渡れ

　ここには東国の山しか出てこない。特に、富士山の歌では「燃えつつかあらむ」「燃えつつあらむ」と、活火山富士山の有り様と、恋の情念がくすぶり続けていることが重ねられており、『万葉集』以降の歌に繋がる表現となっている。集中、富士山をこのように歌うのが当該二首だけであること、また巻十一山の項に東国の山しか登場しないことから（巻十二には山の項がない）、巻十一草の項と同じ指摘が出来るだろう。草の項が名産地を中心とするように、山の項では東国の山に焦点を当て、名所的な楽しさを演出したものと思われる。

　また、ここで例歌を挙げることは省略するが、巻十二天地部の気象に収められている雲・霧・霞・露の項と、動植物部の植物に収められている草の項の前半（三〇三〇〜三〇五〇、三〇五八）の地名も、生駒山、佐保山、切目山が各一例、春日野が二例となっていて、和歌山にある切目山以外は平城京を中心に偏っている。

　勿論、はじめに述べたように例外もある。例えば、巻十二動植物部・植物の草の項の後半（三〇六四〜三〇七六）のように地名がある地域に偏っていない箇所もある（有間―摂津、吉野―大和南部、三笠山―大和北部、田上山―近江、大江山―山城、大崎―和歌山、白月山―近江、住吉―難波）。しかし、大まかに言って、両巻の寄物陳思歌には物象による地名の偏在傾向が認められ、時には名所や名産地への興味までのぞかせている。この傾向は、両巻に独特な地名への関心を表していると言えるだろう。

第二節　地名の歌われ方　入れ替え可能な地名の場合

　寄物陳思歌において、どのような地名が、どのように歌われているかに目を向けると、地名歌には二種類あることに気がつく。一つは、作者判明歌や他巻の作者未詳歌と共通する類型と地名とを組み合わせた歌であり、もう一つは、他巻にない一回的な地名を音による掛詞や音で導く序詞や枕詞に詠み込んだり、地域性の強い非類型的な序詞を持つ歌である。前者は地名の入れ替えが可能であり、後者は地名の入れ替えが不可能である。

　例えば次のような歌がある。⑩一九〇九は、朧気な記憶しかない相手を忘れられず恋い慕う苦しみを歌っており、この種の歌では朧気な相手の記憶の譬喩として雲や霧や霞が持ち出されやすい。また④五九九のよ

うにしっかり見ないまま別れてしまった恋人の歌や、ちらりとでも会いたいと願う歌にも、その逢瀬の仄かな感じを霧などに譬えることがある。

⑩1909　春霞　山にたなびき　おほほしく　妹を相見て　後恋ひむかも

④599　朝霧の　おほに相見し　人故に　命死ぬべく　恋ひ渡るかも　（笠女郎）

不確かな出会いや逢瀬を雲や霧、霞に譬える歌は多く、一つの類型といっていいだろう。その中で、雲などがかかっている場所を地名で挙げているのが次の四首である。

④677　春日山　朝居る雲の　おほほしく　知らぬ人にも　恋ふるものかも　（中臣女郎）

⑪2449　香具山に　雲居たなびき　おほほしく　相見し児らを　後恋ひむかも　（人麻呂歌集）

⑬3294　み雪降る　吉野の岳に　居る雲の　よそに見し児に　恋ひ渡るかも

⑫3037　切目山　行きかふ道の　朝霞　ほのかにだにや　妹に逢はざらむ

具体的な山名が歌い込まれた理由は、作歌時、眼前にその山があったからとも、日常目にする山だからとも考えられる。ただ、山名と歌の内容とは不可分な関係ではない。内容からはその山でなければならない積極的な理由は見あたらない。

②88　秋の田の　穂の上に霧らふ　朝霞　いつへの方に　我が恋止まむ　（磐姫皇后）

右の歌は、山や野などにかかった雲や霧や霞がはれないように恋の気持ちの止む時がないという歌で、同想の歌が多く一つの類型であろう。その地名歌には次のような例がある。

③325　明日香川　川淀去らず　立つ霧の　思ひ過ぐべき　恋にあらなくに　（山部赤人）

④693　かくのみし　恋ひや渡らむ　秋津野に　たなびく雲の　過ぐとはなしに　（大伴千室）

④698　春日野に　朝居る雲の　しくしくに　我は恋増さる　月に日に異に　（大伴像見）

⑪2675　君が着る　三笠の山に　居る雲の　立てば継がるる　恋もするかも

これらの歌でも地名にはそこでなければならないという必然性はない。例えば④六九八の春日野と⑪二六七五の三笠山とを入れ替えても、歌の内容には殆ど影響しないだろう。同様の指摘は、雲や霞の類型以外にもできる。川の流れや波が絶えることがないように恋の想いも途切れることがないという歌も記紀歌謡以来の類型であり、その地名歌には次のような例がある。

日本書紀118　飛鳥川　漲らひつつ　行く水の　間もなくも　思ほゆるかも　（斉明天皇）

④526　千鳥鳴く　佐保の川瀬の　さざれ波　止む時もなし　我が恋ふらくは　（坂上郎女）

⑪2727　酢蛾島の　夏実の浦に　寄する波　間も置きて　我が思はなくに

⑫3029　佐太の浦に　寄する白波　間なく　思ふをなにか　妹に逢ひ難き

これらの歌において地名の入れ替えが可能なのは、既に定着していたと思われる類型と地名との組み合わせで構成されているため作歌の状況を述べる必要性が弱いからだろう。また次の歌のように、類型と言うより類歌と言った方がいい場合も、作歌の状況が内容に影響しないため地名の入れ替えは可能である。

④760 うち渡す　竹田の原に　鳴く鶴の　間なく時なし　我が恋ふらくは（坂上郎女）
⑫3088 恋衣　着奈良の山に　鳴く鳥の　間なく時なし　我が恋ふらくは

⑪2453 春柳　葛城山に　立つ雲の　立ちても居ても　妹をしぞ思ふ
⑫3089 遠つ人　猟路の池に　住む鳥の　立ちても居ても　君をしぞ思ふ

では、類型と地名とを組み合わせた歌で地名の入れ替えが可能である時、両巻の寄物陳思歌では、どのような地名が詠み込まれているのだろう。同じ類型の歌であっても、両巻の作者未詳歌と、作者判明歌や他巻の作者未詳歌とには、地名の選択に違いがあるように思われる。作者判明歌巻である巻四、八ならびに作者未詳歌巻である巻十と両巻所収歌とを比較してみると、巻四、八、十に多い春日周辺の地名が、両巻には少ないことに気がつく。

巻四には、春日が五例、佐保が六例、佐紀沢・三笠社が各一例ある。巻八には、春日が七例、佐保が四例、高円が六例、三笠山が二例ある。巻十には、春日が二十例、高円が二例、佐保・佐紀沢・三笠山が各三例、生駒山が一例ある。これに対して、両巻の寄物陳思歌には、春日が巻十一にわずか一例、巻十二に三例、悲別歌に二例しかない。春日周辺の地名は、巻十一に佐保・佐紀沢・三笠山が各一例、巻十二に佐保・三笠山が二例、佐紀沢・生駒山が各一例となっている。

巻四、八、十と類型歌を多く有しながら、両巻には生活圏内の平城京周辺の地名が少ない。もし民謡説が貴族や専門歌人と比較的等質な民謡を想定するのであれば、平城京周辺の地名がもっと多く出てくるだろう。

一つの類型における両巻の地名の選択についても考えてみよう。藻が靡き寄るようにしっかり心は相手に寄ってしまったという類型では、坂上郎女の歌と巻十三の作者未詳歌では明日香川が歌われているのに、巻十一寄物陳思歌では紀伊国の海が歌われている。

④619 …明日香川　瀬々の玉藻の　うちなびく　心は妹に　寄りにけるかも（坂上郎女）
⑪2780 紫の　名高の浦の　なびき藻の　心は妹に　寄りにしものを
⑬3267 明日香川　瀬々の玉藻の　うちなびく　心は妹に　寄りにけるかも

万葉集に藻の登場する歌は多い。羈旅歌が多く、地名歌は右の三首を含め約四十首ある。最多の地名は明日香川で八例にのぼる。羈旅歌の多さに関わらず明日香川が最も多いことを参考にすれば、貴族や専門歌人と同じ土壌に育った近畿地方の民謡にも明日香川が歌われてしかるべきである。しかし、巻十一では紀伊が歌われている。藻貝の項の地名が紀伊に偏っているからだろう（第一節参照）。

生活圏外の地名を好む傾向は、物象による地名の偏在がない箇所にも見られる。先述した不確かな出会いや逢瀬の感触を雲や霧に譬える型で

は、両巻以外の歌は春日山、香具山、吉野の丘を歌っており大和国内から出ない。しかし両巻の歌にある切目山は、和歌山県日高郡にあり、生活圏から飛び出してしまっている。川の流れや波が絶えることがないように恋の想いも途切れることがないと歌う型においても、両巻が歌うのは酢蛾島（三重県鳥羽湾の周辺）や佐太の浦（筑紫）である。切目山も酢蛾島も佐太の浦も、万葉集に一回しか登場しない。日常的に目にし耳にする地名ではなかっただろう。両巻の寄物陳思歌には、このような地名が三五箇所もある。

　両巻の研究史には、地方を中心とした民謡説と、貴族・専門歌人のいる都を中心とした民謡説とがあった。地方民謡説では生活圏外の地名の多さも理由となった。しかし、両巻の歌の多くは作者判明歌と等質な類型歌であり、貴族層の歌とも人麻呂歌集の歌とも何ら変わりはない。従って、地方民謡説を受け入れることは出来ない。また、貴族・専門歌人と等質な都の民衆の歌として民謡説を主張するなら、生活圏外の地名が多いというのはおかしいことになる。生活圏外の地名の多さは民謡説の根拠とならない。むしろ、地名の偏在と同じ水準で捉え、両巻の特徴と考えるべきではないかと思う。

第三節　地名の歌われ方　入れ替え不可能な地名の場合

　一回的な地名の歌われ方についても考えてみよう。所在不明を除き三五箇所の地名があると思われ、近畿地方が二七箇所と大半を占めている。その他、九州地方・東国地方に各三箇所、備前国・越中国に各一箇所ある。一回的な地名の歌われ方の特徴は、地名音を利用した掛詞や、音で導く序詞や枕詞にあると思う。一回的地名を掛詞や序詞や枕詞に取り入れた例は十九首あり、文脈に合わせて作られているものが多い（a～n）。abcの序詞は地名音で次の言葉を導いており、d～nの序詞や枕詞などでは地名音で掛詞を作っている。これらの序詞や掛詞の一回性を一首ずつ確かめてみよう。

a　⑪2696　荒熊の　住むといふ山の　師歯迫山　責めて問ふとも　汝が名は告らじ　（羈旅発思）

b　⑫3157　我妹子に　またも近江の　安の川　安眠（やすい）も寝ずに　恋ひ渡るかも　（羈旅発思）

c　⑫3011　妹子に　衣かすがの　宜寸川　よしもあらぬか　妹が目を見む

d　⑪2541　たもとほり　行箕の里に　妹を置きて　心空なり　地は踏めども　（正述心緒）

e　⑪2652　妹が髪　上げ竹葉野の　放れ駒　荒びにけらし　逢はなく思へば

f　⑪2752　我妹子を　聞き都賀野辺の　しなひ合歓木　我は忍び得ず　間なくし思へば

g　⑫3019　洗ひ衣　取替川の　川淀の　淀まむ心　思ひかねつも

h　⑪2834　大和の　室生の毛桃　本繁く　言ひてしものを　成らずは止まじ

i　⑪2839　かくしてや　なほやなりなむ　大荒木の　浮田の社の　標にあらなくに

j　⑫3153　み雪降る　越の大山　行き過ぎて　いづれの日にか　我が里を見む　（羈旅発思）

k　⑫3201　時つ風　吹飯の浜に　出で居つつ　贖ふ命は　妹がためこそ　（悲別歌）

l ⑪2638 梓弓　末（陶）の腹野に　鳥狩する　君が弓弦の　絶えむと思へや

m ⑫3195 磐城山　直越え来ませ　磯崎の　許奴美の浜に　我立ち待たむ　（悲別歌）

n ⑫3164 室の浦の　瀬戸の崎なる　鳴島の　磯越す波に　濡れにけるかも　（羇旅発思）

まずaは、娘の恋人の名を聞き出そうと責め問う母を歌う。第四句「責めて問ふとも」の母の凄さや厳しさは、具体的には序詞部分の「荒熊の住むといふ山の」によってイメージされる。この序詞は「師歯迫山（しはせやま）」で「責め」を呼び起こすだけではなく、内容に関わるように作られている。

bにも同様の指摘ができる。bでは「安の川」によって「安眠（やすい）」が導かれているが、「安の川」の上接部分は「我妹子にまたも近江の」と、我妹子にまた逢いたいという願いを歌っている。序詞でまた逢いたいと歌い、今は逢うことが叶わないからこそ、後半「安眠（やすい）も寝ずに恋ひ渡るかも」が意味を持ってくる。

cでは、序詞「我妹子の衣かすがの宜寸川（よしきがわ）」に表れている、妹と衣を貸すような繋がりを持ちたいという具体的な希望が、本旨「よしもあらぬか妹が目を見む」という片恋を支えており、dで「行箕の里（ゆきみ）」に「たもとほり」が上接するのは、その里に妹を置いて行かねばならない主体の、行ったり来たりとさ迷う心を描く為であろう。

eは、恋人に逢えずに荒ぶる主体の心を「竹葉野（たかはの）の放れ駒」のようだと歌っているが、それだけでなく「竹葉野（たかはの）」に上接する序詞「妹が髪上げたく」によって、美しい妹の髪や、その髪を上げて束ねる所作を取り込んでいる。序詞によって、主体が狂うほどに逢いたいと願う恋人のイメージが仄かに重ね合わされることになる。

fの序詞「我妹子を聞き都賀野辺（つがのへ）のしなひ合歓木」では、「都賀野辺（つがのへ）」によって、「聞き継ぐ」ということと、妹のしなやかな姿態を彷彿とさせる「しなひ合歓木」とが繋がれていて、耳に入ってきてしまう恋人の噂と記憶にある妹の様子とが主体を悩ませている様を表現している。

gは、心変わりはしないと誓う男の歌と思われる（『日本古典集成』のみが心変わりを心配する女の歌としている）。恋の淀む歌は万葉集に多く、吉野川（②一一九）、明日香川（⑦一三七九）、松浦川（⑤八六〇）と具体的な川名を出す例もある。ただ取替川（とりかひがわ）は他に例がなく、この選択には意味があるだろう。訪れの淀みがあれば何かあったのではないかと心配する（ⅰ）。そして実際、淀みの原因は何かの障りや人言の場合がある（ⅱ）。また、逢わない間に新しい恋人が出現したのかもしれないとも疑う。だからこそ、そんなことはないと訴える歌が意味を持つ（ⅲ）。

ⅰ ④649 夏葛の　絶えぬ使ひの　淀めれば　事しもあるごと　思ひつるかも　（坂上郎女）

ⅱ ⑫3109 ねもころに　思ふ我妹を　人言の　繁きによりて　淀むころかも

ⅲ ⑪2451 天雲の　寄り合ひ遠み　逢はずとも　異し手枕　我まかめやも

ⅲのようにgも心変わりのないことを誓っているとすれば、序詞の意味も理解される。恐らく、古い着物を洗いたての着物に取り替えるという行為は、新しい恋人の出現を譬えている。それが訪れの淀む背景とな

り、gに具象性を持たせているのだろう。

　hとiでは、地名によってもたらされた具象性が、類歌との違いになっている。⑦一三五八も「毛桃」で「本繁く」を導いているが、hでは「室生の毛桃」となっており、地名音から連想される「群ろ」「生ふ」で、びっしりと繁茂している様をイメージさせる。i「かくしてやなほやなりなむ」は、⑦一三四九「かくしてやなほや老いなむ」と違い、どうナルのかを明かさず、カクの内容を地名「浮田」に込める。「浮田の社」は「標」を呼び起こすだけでなく、行く末の見えない恋故に将来の定まらないまま年を経てゆく主体の在り方を象徴的に表している。

　jの「越の大山」は「行き過ぎ」と掛詞になっていると思われるが、想起される雪深い遠方の地が旅の不安をうたう後半を支えているし、k「吹飯の浜」も枕詞「時つ風」と共に、海から吹く風に体をさらしながら浜に出て祈る主体の様子を目に浮かぶように描く。

　lでは「梓弓の」が「末（陶）」の枕詞のような働きをしており、恋いの絶えない譬えとして弓弦を持ち出す本旨に合うように作られている。mの「許奴美の浜」とnの「鳴島」も序詞に組み込まれているわけではないが、一首を支える比喩[10]的な掛詞になっている。

　このように一回的な地名を用いた掛詞や序詞は歌の内容に合わせて作られている場合が多い。では、一回的でない地名の場合はどうなのだろう。o～sの地名は、三笠山、有間、布留川、奈良山、淡路島など他巻でも多用されている。その歌われ方は、一回的な地名の場合と異なり、定型化した掛詞や序詞を利用している。[11]

o
⑪2675　君が着る　三笠の山に　居る雲の　立てば継がるる　恋もするかも
⑥987　待ちかてに我がする月は妹が着る三笠の山に隠りてありけり　（藤原八束）

p
⑪2757　大君の　御笠に縫へる　有間菅　ありつつ見れど　事なき我妹
⑫3064　人皆の　笠に縫ふといふ　有間菅　ありて後にも　逢はむとそ思ふ

q
⑫3013　我妹子や　我を忘らすな　石上　袖布留川の　絶えむと思へや
④501　娘子らが　袖布留山の　瑞垣の　久しき時ゆ　思ひき我は　（人麻呂）

r
⑫3088　恋衣　着奈良の山に　鳴く鳥の　間なく時なし　我が恋ふらくは
⑥952　韓衣　着奈良の里の　妻松に　玉をし付けむ　良き人もがも　（笠金村／車持千年）

s
⑫3167　波の間ゆ　雲居に見ゆる　粟島の　逢はぬもの故　我に寄そる児ら　（羈旅発思）
⑮3633　淡島の　逢はじと思ふ　妹にあれや　安眠も寝ずて　我が恋ひ渡る

　一回的な地名を用いた掛詞や序詞が歌の内容に合っているのは、地名音の選択範囲が広く、新しい掛詞や序詞が作りやすかったからだろう。その背景には生活圏外の地名を好む両巻の傾向がある。そうして作られた序詞によって、定型化が進んだありふれた地名の序詞では表現し得なかった効果がもたらされたように思う。

　その効果と同じ水準でA～Eも理解できるだろう。A～Eはその土地

の風俗を写し取ったような序詞に特徴がある。土着の民謡のようにも見えるが、果たしてそうだろうか。

A ⑪2645 宮材引く　泉の杣に　立つ民の　休む時なく　恋ひ渡るかも
B ⑪2646 住吉の　津守網引の　浮けの緒の　浮かれか行かむ　恋ひつつあらずは
C ⑪2648 かにかくに　物は思はじ　飛騨人の打つ墨縄のただ一道に
D ⑪2651 難波人　葦火焚く屋の　すしてあれど　己が妻こそ常めづらしき
E ⑪2699 阿太人の　梁打ち渡す　瀬を早み　心は思へど　直に逢はぬかも

Aの泉で宮材を引き出す様は、藤原宮之役民作歌①五〇にも歌われている。Bの網引漁については、長意吉麻呂の応詔歌③二三八に歌われており、Cの墨縄についても、山上憶良の好去好来歌⑤八九四に歌われている。またCの上三句までは『歌経標式』にも記されている。Dに歌われている難波は葦の名所として聞こえた所であるし、Eの阿太人が梁を打ち渡して漁をすることは神武即位前紀に出ている。A～Eの景はどれも有名であり、目にしたことがなくても知っていただろう。これら風俗を写し取ったような序詞は、その景が持つ具象性や喚起力を見込んで作られたものではないだろうか。

⑪2649 あしひきの山田守る翁置く鹿火の下焦がれのみ　我が恋ひ居らく

地名はないが右の序詞も農民生活から生まれたように見える。しかし、山中の田を見張る翁が鹿火を焚いていると言われれば都人にも想像することは難しくないだろう。鹿火がなかなか燃え立たず中で燻っている様など、木を燃やした経験があれば誰にでも分かる。この序詞によって、本旨「恋ひ居らく」は共感を呼ぶ言葉になっている。

有名であったり想像しやすい風俗を取り込む序詞も、一回的な地名を用いた一回的な序詞と同様に、具体的なイメージを付与している。掛詞や序詞へのこのような地名の取り込み方は、表現手法として理解すべきもので、民謡の特徴ではないだろう。

まとめ

両巻所収寄物陳思歌の地名含有率の高さは、民謡であることに起因するものではなく、生活圏外の地名への関心（第一節）を背景として類型歌に地名が詠み込まれ、地名を用いた序詞が作られた（第二節、第三節）結果と見られる。このような歌を受容し必要とした基盤とは何だったのかが改めて問題となる。

高木市之助と土橋寛は両巻を作歌参考書と考えた（はじめに）。独特な地名への関心は作歌の参考には相応しくないが、両巻の歌に作者判明歌や他巻の作者未詳歌にない汎用性があることも事実である。それは序詞に志賀の海人を歌い込むケースからも推察できる。

Ⅰ ⑪2742 志賀（しか）の海人の　火気焼き立てて　焼く塩の　辛き恋をも　我はするかも
Ⅱ ⑮3652 志賀（しか）の海人の　一日もおちず　焼く塩の　辛き恋をも　我はするかも

志賀の歌二七首のうち海人の歌は一二首ある。しかし、そのうち恋歌

はわずか五首しかない。本来、志賀の海人は旅の景物だったのだろう。恋歌五首のうち四首は両巻の作者未詳歌であり、残りの一首は遣新羅使人歌である。その遣新羅使人歌は巻十一の歌に酷似している（Ⅰ・Ⅱ）。また、海人と「いざり」を同時に歌う例も巻十二に一例と恋歌でない遣新羅使人歌に二例しかなく、両巻の歌と遣新羅使人歌とには影響関係が認められる。志賀の海人を恋歌に持ち込んだのは、歌数から考えて両巻の歌が先であった蓋然性が高く、遣新羅使人に影響を与えたのだろう。

このような影響関係にある両者に違いはないのだろうか。Ⅰは「志賀の海人の火気焼き立てて焼く塩の」に「辛き恋」を譬えている。煙をあげ塩をふきながら焼けていく海藻の様が、どうにもならない恋への焦りと火に炙られているようなつらさを表現する。これに対してⅡはどうだろう。「志賀の海人の一日もおちず焼く塩の」にⅠのような焦燥があるだろうか。どれほど苦しい「辛き恋」かを訴える表現としては、「一日も落ちず」より「火気焼き立てて」の方が相応しいように思われる。

しかし遣新羅使人という立場を考えると「一日も落ちず」は意味を持ってくる。休むことなく海藻を焼き続ける海人の姿が、その焼く塩の辛さと相まって「辛き恋」の譬えとなるのは、つらい旅にある使人の歌だからではないだろうか。「一日も落ちず」を介して、使人は海人の姿と自身の姿とを重ねたのかもしれない。

単なる類歌として処理することの出来ない違いが両者にはある。遣新羅使人歌はその立場を理解してはじめて意味を持つ一回的な歌であり、巻十一の歌は誰がいつどのような立場で歌ったか問題にしない汎用性のある歌なのだろう。この汎用性は、両巻所収作者未詳歌の多くに指摘できると思われる。[12]

本稿では、両巻の寄物陳思歌が、珍しい地名をきっかけとして、場に縛られない汎用性を持つに至ったことを見てきた。同様の傾向は正述心緒歌にも認められる。正述心緒歌も、喚起力のある歌ことばや複合語や類型によって、場を問題としない内容になっていると考えられるからである（拙稿「万葉集噂の歌考―巻十一・十二を中心に―」青山語文第三十三号・「万葉語「〜ヅマ」について」上代文学第九十三号）。このような歌を受容する基盤とは何か。歌材別編纂方針が取られていることに地名への独特な関心を考え合わせると、両巻の目指したところは作歌の場を問題とせず誰にでも楽しむことのできる読み物としての巻だったのではないかと思う。

注

(1) 両巻の性格について初めて意見を述べた賀茂真淵（『万葉考』明和五）も両巻の歌を奈良以前の古い歌としながら民謡とは考えていなかった（河野頼人『万葉学研究・近世』昭和四四　参照）。『万葉集略解』も『万葉集古義』も真淵の意見を引き継いでいる。明治になり国民歌集として発明されていく中で民謡と結びつけられた（品田悦一『万葉集の発明』平成一三）。「民謡」は漢語であり、日本語の「民謡」は明治二四年に森鷗外が「Volkslied」（「民族／民衆の歌謡」の意でJ・G・ヘルダーの造語）を「民謡」と訳したことに始まる（『日本民謡大事典』浅野建二・編　昭和五八）。

(2) 初めて万葉集の中に民謡の存在を指摘。対象は巻十四の東歌だった。

(3) 「古代民謡史論」昭和七・「短歌の古代性」昭和二六・『日本古典文学大系6 万葉集三』の「解説」昭和三五。

(4) 民謡は原始社会の産物であり、社会性・歌謡性・素朴性を属性とするという考え。柳田国男（『民謡覚書』昭和一〇）、鶴見俊輔（『限界芸術論』昭和

四二）らに共通し、現実的・社会的機能を条件とする点で民謡説論者より民謡の範囲を狭く捉えている。

(5)「万葉序説」『万葉開眼（上）』昭和五三・「民謡と創作歌の間」『万葉集研究第九集』昭和五五。

(6)折口信夫「大和時代の文学」昭和八・「記紀歌謡」昭和一一・「万葉集の恋歌」昭和一三など。

(7)吉田義孝『柿本人麻呂とその時代』（既出）。

(8)土橋寛「序詞の概念とその源流」昭和三一。本稿で取り上げた両巻の地名を含む序詞の多くは心情を表現しており、即興的ないし属目の景物を取り込んだとは考えにくい。民間の寿歌に始まる序詞の基本的性格と巻十一・十二の序詞との関係については今後の課題としたい。

(9)物象ごとの配列を明らかにした伊藤博の研究（『万葉集の表現と方法　上』昭和五〇）・『新潮日本古典集成　万葉集三』解説　昭和五五）を元にしている。

(10)m「許奴美（こぬみ）の浜」は、女神が男神の来ぬのを待つ伝説を背景にしている（下河辺長流『続歌林良材集　上』）。伝説と結びつくのは後の時代であるという反論（久松『万葉集総釈　第六』既出）もあるが、地名音から「来ぬ」が連想されるのは自然なことだろう。「待たむ」と言いながら信じ切れない待つ女の気持ちが凝縮されている。同じようにn「鳴島」も『代匠記』に指摘があるように、故郷の妻を思って泣くことと掛けてある。

(11)⑪二六九八、二七二二、⑫三〇〇九のように一回的地名でなくとも用例の二例ほどしかない地名（浅香潟や和射見野）や大和国でない珍しい地名を用いた例で一回的な序詞を形成する場合もある。

(12)左の例のように汎用性のない特殊な序詞を持つ歌もある。このような歌は、喚起力のある独特な序詞によって読み物としての面白さ追求したものであろう。

⑪2649　あしひきの山田守る翁置く鹿火の下焦がれのみ　我が恋ひ居らく

⑪2651　難波人葦火焚く屋のすしてあれど　己が妻こそ常めづらしき

（とちお　ゆき・本学日本研究センター研究員）